REPORT @KCUA

ISSN 2435-6018

Kyoto City University of Arts
Art Gallery @KCUA

2019–2020

Table of Contents
目次

展覧会｜Exhibitions
19 特別展｜Special Exhibitions
59 申請展｜KCUA Open Call Exhibitions
81 大学事業｜KCUA Exhibitions

92 印刷物｜Printed matter
95 刊行物｜Publications
100 @KCUAについて｜About @KCUA
102 運営委員会｜Steering Committee

凡例
・ 肩書きは2019年度当時
・ 特に会場名の明記のないものは京都市立芸術大学ギャラリー @KCUAにて実施
・ Names are listed in Japanese alphabetical order (some exceptions may apply).
・ All exhibitions and events were held at Kyoto City University of Arts Art Gallery @KCUA unless otherwise noted.

COVER PHOTOS

ジェン・ボー「Dao is in Weeds」
（道在稊稗／道（タオ）は雑草に在り）

@KCUAでは毎年、国際的に活躍する海外作家の創造と実践に触れる機会として、展覧会や実践的なワークショップ、レクチャーなどを実施しています。2019年度の招聘作家の一人であるジェン・ボーは、大学移転という次なる大きな変化を受け入れようとする崇仁地域を舞台に、さまざまな専門を持つ人々とともに、より良き生態学的未来、全ての種の生物における平等をめぐるワークショップ「EcoFuturesSuujin」を実施しました。その記録や成果物は、個展「Dao is in Weeds」で発表された、崇仁地域についての学びを深めるための空間「Suujin Study Room」にて公開されました。

（→pp. 21–36）

REPORT @KCUA 2019–2020

京都市立芸術大学 Kyoto City University of Arts @KCUA

art
미술

Kyoto City University of Arts Art Gallery @KCUA 2019–2020

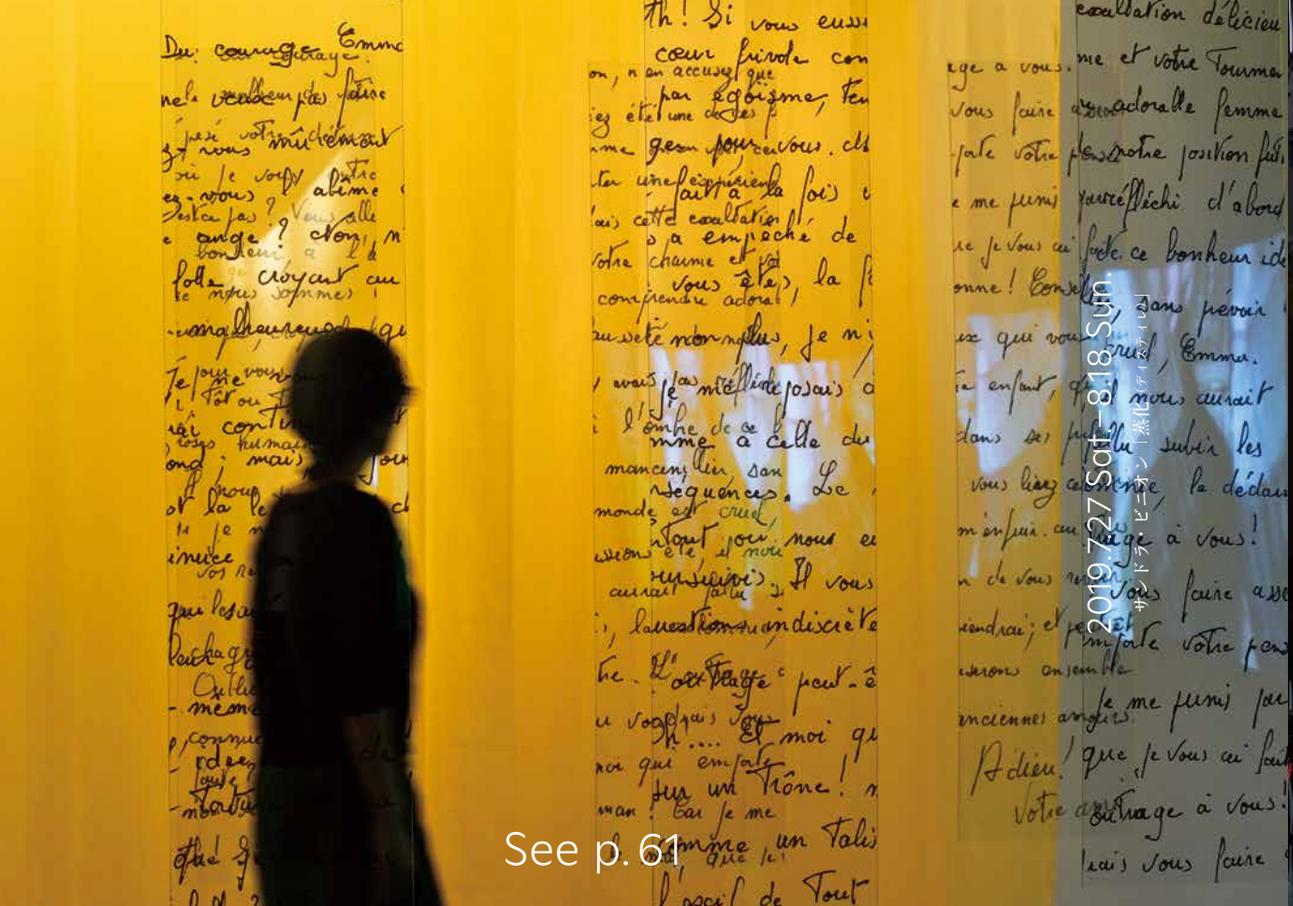
「@KCUA（アクア）」とは、京都市立芸術大学の英語表記「Kyoto City University of Arts」の頭文字に場所（サイト）を示す「@」を付けたもので、音読するとラテン語の「アクア＝水」となります。生命を養う水のように、芸術が人々の暮らしに浸透し、創造力豊かな社会に貢献するという本学の理念を表現しています。

京都市立芸術大学ギャラリー@KCUAでは、その名に込められた思いのもとに、流動体のように軽やかに、アートとひとをつなぐ活動を行っています。@KCUAとその周辺に広がる創造活動によってまかれた種が、やがてその枝を伸ばして大きな木となることを願いながら、展覧会だけにとどまらず、多岐にわたる事業を手がけています。

2019年度は、当ギャラリー学芸員の企画による特別展として、香港在住のアーティスト、ジェン・ボーによる個展や、ニューヨーク在住のアーティスト、ジョーン・ジョナスの京都賞受賞展覧会など4本の展覧会を、また京都市立芸術大学の研究成果発表展ならびに教員・在学生・卒業生による企画展など、年間13本の展覧会を開催しました。また、9月に実施した、情報を「再編集」しながら新たな視点を得るためのプロジェクト「still moving library」を起点として、ウェブサイトのリニューアルをはじめとしたアーカイブ機能の充実と、その活用について考える取り組みも進行中です。

See p. 37

See p. 21



See p. 61

2019.7.27 Sat.–8.18 Sun.

ザンドラ・ビニオン「素朴デイズイン」

2019.8.31 Sat.–9.16 Mon.

吉岡俊直「複眼と対称のノード」

See p. 65

2019.8.31 Sat.–9.16 Mon.

ぼくらとみんなは生きている5～持続可能な愛のステージ～

See p. 69

2019.9.28 Sat.–11.3 Sun.

京都市立芸術大学芸術資料館収蔵品活用展

still moving library

See p. 45

2019.11.9 Sat.–11.24 Sun.

2019年度 京都市立芸術大学美術学部同窓会展

漆工（塗装）専攻の今熊野時代・沓掛時代を振り返る

See p. 82

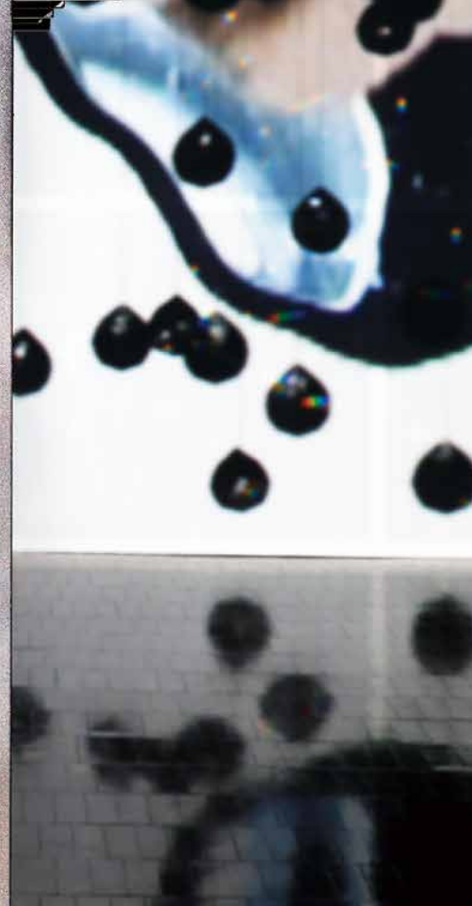
2019.11.9 Sat.–11.24 Sun.

岡本秀「次元のえんそく（メタ－ピクニック）」

See p. 73

2019.11.28 Thu.–12.8 Sun.
京都市立芸術大学 | 第30回留学生展
See p. 84

2019.12.14 Sat.–2020.2.2 Sun.
ジョーン・ジョナス京都賞受賞記念展覧会
「Five Rooms For Kyoto: 1972–2019」
See p. 51



2020.2.15 Sat.–3.1 Sun.

See p.86

2020.2.15 Sat.–3.1 Sun.

森山佐紀・山西杏奈「朝と夜、森にて」

See p.77

See p. 88

SPECIAL EXHIBITIONS

Curated by
Kyoto City University of Arts
Art Gallery @KCUA

特別展

「特別展」とは、@KCUA学芸スタッフの企画による展覧会です。芸術を育む場所である芸術大学のサテライト施設＝発信拠点である@KCUAでは、作品について「考える」「作る」プロセスを公開する場として、また大学だからこそ可能な先駆的・実験的な事業を展開しています。京都市立芸術大学の卒業・修了生を中心とした若手アーティストの支援、国際的に活躍するアーティストの創造と実践に触れる機会の創出、研究に根差した高い専門性を持つプロジェクト、また2023年に予定された大学キャンパス移転のプレ事業など、多種多様な企画に取り組んでいます。

ジェン・ボー（鄭波）「Dao is in Weeds」

（道在稊稗／道（タオ）は雑草に在り）

Zheng Bo: *Dao is in Weeds*

2019.6.1 Sat.–7.15 Mon.

史実や社会現象についての緻密な調査をもとに、雑草をはじめとする植物と協働して未来を考察するための作品を手がける気鋭のアーティスト、ジェン・ボーは、2019年1月と3月の2回に渡って京都での滞在調査を行った。京都市立芸術大学の移転予定地である崇仁地域（京都駅東部エリア）を訪れた彼は、その歴史を学び、まちづくりの最中で日々環境が変化していく現在の様子に強い関心を抱く。そして、大学移転という次なる大きな変化を受け入れようとするこの地域を舞台に、活動家、美術家、建築家、文化人類学者、歴史学者、生態学者などのさまざまな専門を持つ人々と共に、より良き生態学的未来、全ての種の生物における平等をめぐるプロジェクトを実施することになった。本展では、これらの調査をもとに構成したインスタレーションが展開された。

今年の1月、私は初めて崇仁地域を訪れ、いくつかの事実やそこで見たものに衝撃を受けました。そこにあるたくさんの「空き地」。最盛期には10,000人だった人口が1,000人にまで減少していること。鴨川と高瀬川という、たくさんの生き物を育むことのできる2つの川を有するという特徴的な環境。屠畜業者、皮革職人、庭師といった、この地域の人々が長く携わってきた職業が、動物や植物と密接に関係していること。またこの地域が、平等の観念を中心とした長きに渡る社会運動の歴史を持つこと。そして近い将来に控える京都市立芸術大学の移転が、この地域のコミュニティ、景観、生態系を大きく変化させるということに。これらの条件が合わさることによって、崇仁地域という比類のない実り多き場所は、現在の「人新世」の道筋からかけ離れた生態系の将来像を私に思い起こさせます。

また私は、この地域の活動家やアーティストたちがすでに環境問題に関する活動を数年間にわたり行っていることを知りました。こうした中で、招聘アーティストとしてこの地域にどのように貢献することができるだろうかと考えました。いろいろと考えるうち、自分は崇仁地域の未来を描くための中心的な考えをあらゆる種の生物の活性とすることに対してお手伝いができると確信しました。柳原銀行記念資料館事務局長の山内政夫さんに全国水平社創立宣言（1922年）を見せていただいた時、私は深く感動しました。しかし私は、この先見の明ある文書を拡張し、他の生物をも含めての平等を追い求める時が来ているとも考えています。

私はこの展示室を学習室にすることにしました。ここでは崇仁地域の基礎を学ぶことができます。そして、その学びをもとに一人ひとりが実際にこの地域を訪れて、崇仁地域の将来に寄与することを心から望んでいます。

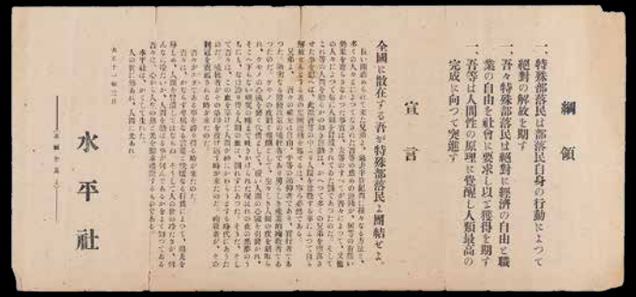
2019年5月30日　ジェン・ボー

私たちが作成中の

『Suujin Visual Reader: 崇仁視覚読本』の草案

撮影（現在の写真）: 草本利枝、来田 猛、KentaHasegawa、松見拓也、@KCUA スタッフ
提供（過去の写真）: 柳原銀行記念資料館

全国水平社創立宣言（1922年）



綱領

一、特殊部落民は部落民自身の行動によつて絶對の解放を期す

一、吾々特殊部落民は絶對に經濟の自由と職業の自由を社會に要求し以て獲得を期す

一、吾等は人間性の原理に覺醒し人類最高の完成に向つて突進す

宣言

全國に散在する吾々特殊部落民よ團結せよ

水平社

1922年3月3日に京都市の旧岡崎公会堂で開催された全国水平社創立大会において採択された日本初の人権宣言。被差別部落の人びと自らが誇りを持ち、団結し、立ち上がることや、人間の尊厳と自由平等の理念を掲げ、すべての差別の撤廃と人間解放を謳っている。その理念は、被差別部落の人々のみならず、在日朝鮮人、沖縄の人々、アイヌ民族、ハンセン病回復者等の国内の被差別マイノリティだけでなく、日本の植民地支配下にあった朝鮮の被差別マイノリティ「白丁（ペクチョン）」を中心に結成された衡平社（ひょうへいしゃ）、海外の被差別マイノリティの権利回復に向けた社会運動にも多大な影響を与えるなど、歴史的にも重要な役割を果たしてきた。

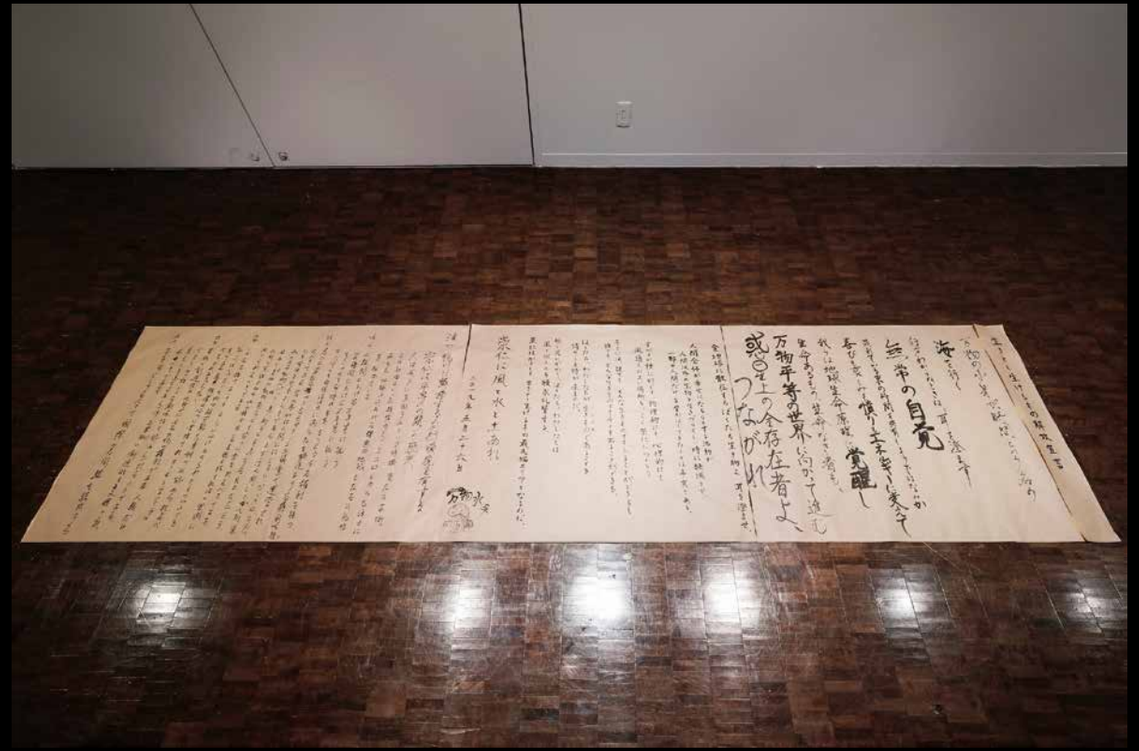
ワークショップ「EcoFuturesSuujin」

2019年5月24日から26日にかけて、ワークショップ「EcoFuturesSuujin」を初開催。

1日目　5月24日（元崇仁小学校）
各参加者が30分間ずつ「平等」をテーマに講義を行う学びのセッションを設けた。

2日目　5月25日（京都一周トレイル西山コース）
ハイキングをしながら他の生物や参加者と触れ合うことができた。

3日目　5月26日（元崇仁小学校）
1922年の全国水平社創立宣言の更新案を作成する作業をした。



崇仁の食べられる野生植物

崇仁地域の「空き地」はさまざまな生物を宿しており、そこに自生する多くの植物は食べることができる。そのうちのいくつかを展示室に運び、試食可能とした。

Survival Manual I

『上海野生食用植物』（1961年発行）の模写
2015

中国では「大躍進政策」（1958–60）が引き起こした大飢饉の際、民衆が飢えをしのげるよう、共産党が『上海野生食用植物』を1961年に発行した。本作はこの書物をジェン・ポーが2015年に模写したもの。

Survival Manual II

『台湾野生食用植物図譜』（1945年発行）の模写
2016

1945年3月、台湾では食糧戦に備えるため『台湾野生食用植物図譜』という日本語の書物が発行された。本作はこの書物をジェン・ポーが2016年に模写したもの。いかに人類が植物とともに政治的危機を乗り越えてきたかと同時に、危機に直面した人類が雑草たちの存在を重要なものとして認識してきたことを物語っている。

2016年の台北でのアーティスト・イン・レジデンスでのリサーチを契機として始まった映像作品のシリーズ。“pterido-”は「シダ」を意味する接頭辞、“-philia”は「あるものに対する愛情又は嗜好性」を意味する接尾辞で、いずれもギリシア語由来。台湾においてシダは、原住民に古くから大切にされるなど歴史的にも重要な植物である。台湾が日本の植民地であった時代に移住してきた日本人の画家たちが、台湾の美しい花々に魅せられたこと、とりわけ第2次世界大戦の終戦間際に日本軍が、また終戦後には中国本土からやってきた国民党が、食用シダを救荒植物として用いたことに着想を得たジェン・ポーは、人間と植物との共存関係について考察する《Pteridophilia》の制作に着手した。権力、統制と服従などが政治、性愛、そして生態学においてどのように現れるかを探ってきたジェン・ポーは、胞子が発芽して形成される前葉体で受精することによって増えるシダ植物を「クィア」な植物と定義し、これらと「クィア」な人々との親密な関係性を描くことで「エコ・クィア」の可能性を探求している。本展ではシリーズ最新作の《Pteridophilia4》(2019)が世界初公開となる。

Pteridophilia 1-4

2016–19 | 68分

Fern as Method 格蕨

2019

参加型の作品である本作において、ジェン・ボーは、スケッチをすることにより地質時代「人新世」におけるエネルギー多消費型社会を一時的に離れて、我々を取り巻く生物圏に目を向けることを鑑賞者に呼びかける。スケッチという行為は、集中や忍耐を要する。参加者となる鑑賞者それぞれがシダを一つ選んでスケッチを行い、スケッチが完成したら持ち帰らずに、会場内に置かれた木箱に入れる。後にそれらのスケッチは堆肥になり植物の肥やしとなって、生命の循環が達成されるのである。作品のタイトルである《Fern as Method 格蕨》は、中国明代の思想家であり儒学者の王陽明に由来する。王陽明は、事物の理を究めることにより良知を極める「格物致知」を実践し、悟りに至るために竹の理を究めようと沈思した。結局、王陽明の試みは失敗に終わったが、この逸話は事物の理を究める切迫感を抱いていたジェン・ボーにインスピレーションを与えることになる。

背の高い建物がそう多くないせいだろうか、特によく晴れた昼間はいつも光に満ち溢れている。ゆっくりと歩きながら、崇仁の街の中を流れる高瀬川の穏やかな流れや、至るところで自由に育った植物を眺めたり、道を歩いていれば必ず出会う鳥・猫などの動物たちを目で追ってみたりする。時の流れがとてもゆるやかで心地よく、人々が忙しなく行き来する京都駅のすぐ近くだということを、いつも忘れそうになる。
はじめて崇仁の街を訪れたとき、かつて多くの人がそこで暮らしていたことを思わせる細い道の数々と、フェンスに囲まれたたくさんの空き地、その内側で失われたものを埋め尽くそうとするかのように植物が生い茂るさまに目を奪われた。それから崇仁に何度となく通ううちに、空き地と空き地がどんどん繋がって、それらの間にあった細い道は無くなっていった。2021年3月現在は大部分がすっかり整地されてしまったが、それでもまだ、誰かがずっと守ってきたもの、大事にしてきたものが生きていることを、街のあちこちで感じることができる。

ジェン・ボーはこの崇仁の街にやってきて、駆除されることなく伸び伸びと育った植物や、鴨川や高瀬川で羽を休める鳥たちの様子を優しい顔で眺めていた。そして彼は、あらゆる人に平等な社会のあり方を問う社会運動の歴史に感銘を受け、この街がいかに豊かで、希望に満ちた未来への可能性を秘めているかを私たちに力説した。そして、1922年の全国水平社創立宣言を、人類の平等を説くものから、地球上の全ての生物における平等を説くものへと更新するためのワークショップ「EcoFuturesSuujin」(pp. 26–27)を考案することになる。
最終日となる3日目に、はじめに一人で、次に三人ずつのグループで、最後には1970年代以前生まれと1980年代以降生まれの二つのグループに分かれて、話し合いながら宣言文を起草した。私ははじめに、崇仁の地にあってこれからもずっと守りたいものは、あらゆる生きものが心地よく生きることのできる、風と水と土だと考えた。次に三人ずつのグループになったとき、皆が同じように考えていたことに驚き、また嬉しく思った。そしてそれは、最後まで私たちのグループの起草した宣言の中心となった。

展覧会では、1階にこの「EcoFuturesSuujin」を中心に、ジェンが学んできたのと同じように来場者も崇仁を学ぶことのできる部屋《Suujin Study Room》(pp. 24–28)が、そして2階には人間と植物との共存関係について考察する映像4部作の《Pteridophilia》(pp. 30–31)、シダを写生し、それらを堆肥にして自然に返すことで生命の循環を作ろうとする《Fern as Method 格蕨》(pp. 32–33)、救荒植物に関する書を手書きで写した《Survival Manual》(p. 29)の2部作(現在は、一関藩の藩医、建部清庵による食用植物に関する書『備荒草木図』(1833)を写した3作目が追加されている)の3シリーズが展示された。展示を完成させたジェンは「1階では頭を使って学ぶ。2階では、シダ植物と人間が交わる映像を鑑賞し、写生し、リラックスしながら身体を通して何かを感じとる。そしてまた1階に戻って、続きを学ぶ。そうやって、長い間ここで過ごすことができる」と嬉しそうに言った。生態学的な叡智を求めて研究を続けるジェンによって生み出された、幸せな循環の形であった。

循環というからには、ひとときで終わってしまうものではいけない。ジェンと私たちは、自分が崇仁を知って魅了されたのと同じように、視覚的にこの街の魅力を伝える『Suujin Visual Reader』を作りはじめていた。まず草案が《Suujin Study Room》の中に展示され、展覧会の会期終了後も編集は続いた。それがジェンからバトンを受け取った、私にとっての宿題となった。当初は柳原銀行記念資料館からお借りした古い写真と、現在の写真とを取り混ぜて構成していたのだが、さまざまな人々の意見を聞いていくうちに、撮り手も属性も異なる写真の集合体から、果たしてジェンが崇仁を訪れて感じたのと同じような体験をもたらすことが可能かどうかを悩むようになった。
では、大学が移転するまで、そして移転したのちも、新しく崇仁の街にやってくる人々に、シンプルに思いを伝えることのできる本にするためには何が必要なのか——。
悩んだ末に私の出した答えは、選んだ写真の一つ一つを本の作り手の視点で捉えたものに置き換えるべく、絵に写しとるというものだった。この提案にはジェンも賛成し、ワークショップの参加者で崇仁にアトリエを構えるアーティストの森夕香に、彼女自身の崇仁へのまなざしをも含みつつ、絵にしてもらうことを依頼した。
そうして時間をかけて、少しずつ温めてきたこの本は、あともう少しで完成する。学び、反芻し、悩み、考え、そして写し、また学ぶという循環のなかで生まれたこの小さな本が、希望に満ちた未来へとつながることを祈りつつ、世に放つのだ。そしてこの本が崇仁を訪れる人々だけでなく、世界中の様々なところに届き、人々に気づきと学びをもたらす種となること、それがジェンの願いなのである。

(藤田瑞穂／@KCUAチーフキュレーター／プログラムディレクター)

ジェン・ボー(ZHENG Bo／鄭波)
1974年北京生まれ、香港在住。アーティスト、研究者、文筆家として活動。地域の歴史についての緻密な調査から、政治的な史実、アーカイブなどの過去の事物の調査にそれらを結びつけ、雑草などの植物と協働しながら未来について考察する作品で知られる。彼は良き人新世のために、生態学的な叡智を求めて修行中である。

写真　草本利枝（p. 23）、米田 猛（pp. 21, 24-33, 36）
Photos by Takeru Koroda (pp. 21, 24-33, 36), Toshie Kusamoto (p. 23)

2019年6月1日（土）–7月15日（月・祝）
ジェン・ボー「Dao is in Weeds」
（道在稊稗／道（タオ）は雑草に在り）

展示室：@KCUA 1, @KCUA 2, Gallery B（Gallery Bのみ7月7日（日）まで）
開催日数：39日間
入場者数：1,395人
企画：京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA
主催：京都市立芸術大学
助成：芸術文化振興基金、
　公益財団法人花王芸術・科学財団
協力：柳原銀行記念資料館

関連イベント
・1月27日（日）15:00–16:30
　ジェン・ボー レクチャー「ポスト社会主義の中国におけるソーシャリー・エンゲージド・アート」
・6月1日（土）
　15:00｜ギャラリートーク・プレゼンテーション
　17:00｜オープニングレセプション

京芸 transmit program 2019

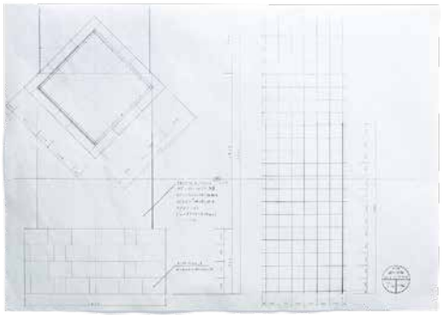
KCUA Transmit Program 2019

黒川 岳、寺岡波瑠、本山ゆかり、山本真実江
Gaku Kurokawa, Haru Teraoka, Yukari Motoyama, and Mamie Yamamoto

2019.4.13 Sat.–5.19 Sun.

山本真実江 Mamie Yamamoto

本山ゆかり Yukari Motoyama



寺岡波瑠 Haru Teraoka

黒川 岳 Gaku Kurokawa

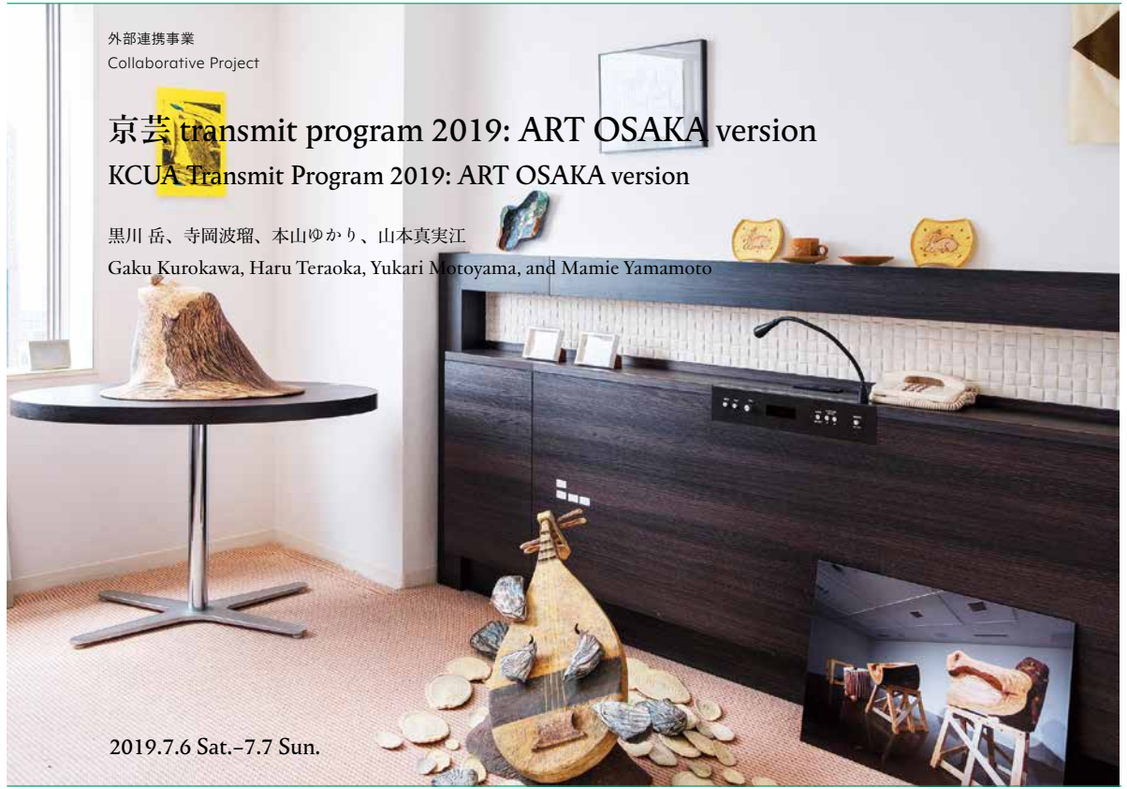
「京芸 transmit program」は、アーティストの活動場所として日本でも1、2を争う都市京都における期待の新星を紹介するシリーズとして、京都市立芸術大学卒業・大学院修了3年以内の若手作家の中から、いま、@KCUAが一番注目するアーティストを紹介するプロジェクトである。第3弾となる本年は、黒川岳（彫刻）、寺岡波瑠（環境デザイン）、本山ゆかり（油画）、山本真実江（陶磁器）の4名を選出した。

写真　来田猛
Photos by Takeru Koroda

2019年4月13日（土）–5月19日（日）
京芸 transmit program 2019

展示室：@KCUA 1, @KCUA 2
開催日数：34日間
入場者数：5,847人
企画：京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA
主催：京都市立芸術大学

関連イベント
- 4月13日（土）
  15:00｜ギャラリートーク
  17:00｜オープニングレセプション
- 黒川 岳パフォーマンス
- 4月13日（土）15:00
  オープニングパフォーマンス
- 4月14日（日）16:00
  ゲスト：邂逅（neco／谷口かんな／遠藤僚之介）
- 5月3日（金・祝）18:00–
  ゲスト：邂逅（neco／谷口かんな／遠藤僚之介）
- 5月4日（土・祝）17:00
  ゲスト：アキビンオオケストラ
- 5月12日（日）
  18:30｜ゲスト：好光義也
  19:00｜ゲスト：マルガサリ
- 5月19日（日）18:30
  クロージングパフォーマンス



ホテルグランヴィア大阪で開催されるアートフェア、ART OSAKAの特別企画として、「京芸 transmit program 2019」出展作家による展示を行った。

2019年7月6日（土）–7月7日（日）
京芸 transmit program 2019: ART OSAKA version

展示室：ホテルグランヴィア大阪26階 6101号室
開催日数：2日間
入場者数：3,060人（7月5日（金）のプレビューを含む）
企画：京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA
主催：一般社団法人日本現代美術振興協会
協力：京都市立芸術大学、京都市立芸術大学キャリアデザインセンター
後援：京芸友の会

関連イベント
・黒川 岳パフォーマンス
　7月6日（土）12:00–12:10
　7月7日（日）12:00–12:10

京都市立芸術大学芸術資料館収蔵品活用展
Exhibition with works from the collection of the Kyoto City University of Arts Art Museum

still moving library

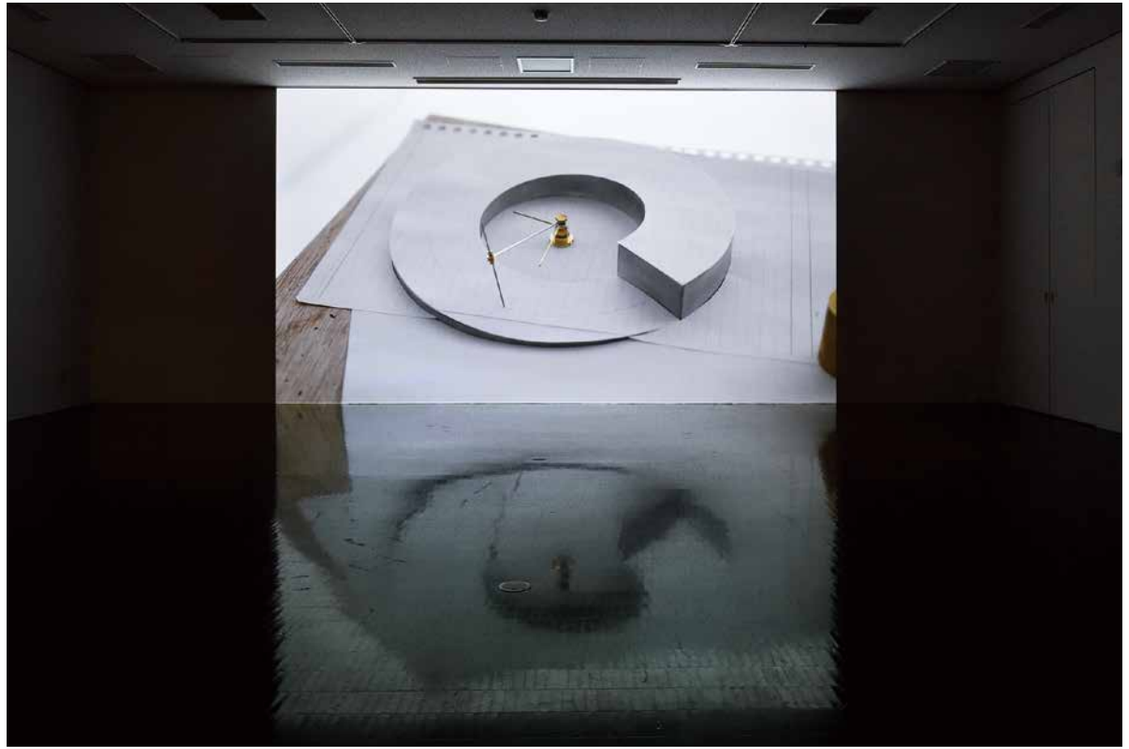
2019.9.28 Sat.–11.3 Sun.

本棚する

富本憲吉『わが陶器造り』

ギャラリーのアーカイブで遊ぶ

美術における映像アーカイブ



書籍・情報・人の集まる場所、図書館。2023年に京都市立芸術大学が移転を予定している新キャンパスの建物のうち、京都市立芸術大学ギャラリー@KCUAの入る棟では、図書館がその中心となっている。大きく開かれた吹き抜けのある図書館の周りには、さまざまな専攻や機関が配置され、多様な出会いと連携が生まれることが期待されている。

図書館とは、いくつもの資料やアーカイブが集積され、それらをめぐって人々が集う場所である。本を読みに来る人、静かな場所を求めてやって来る人、イベントや講座に参加するために来る人、そして図書館で働く人々も、この場に集まった情報を選び取り、それぞれの形で活用する。これらは全て、図書館が有する有形・無形を問わないアーカイブを「再編集」する作業だと言えるだろう。

「still moving library」は、書籍をめぐるさまざまな「再編集」のかたちから、図書館という場所の活用について考えるための期間限定のライブラリーである。

書籍出品者＝
京都市立芸術大学教員：
石原友明（美術学部油画専攻教授）
岡田加津子（音楽学部作曲専攻教授）
奥村美佳（美術学部日本画専攻准教授）
小山田 徹（美術学部彫刻専攻教授）
砂原 悟（音楽学部ピアノ専攻教授）
竹内有一（日本伝統音楽研究センター教授）
玉井尚彦（美術学部共通教育准教授）
津崎 実（音楽学部音楽学専攻教授）
礪波恵昭（美術学部総合芸術学科教授）
中原浩大（美術学部彫刻専攻教授）
「still moving library」プロジェクトメンバー：
岸本光大（ギャラリー@KCUA学芸員）
榊原充大（建築家／リサーチャー）
佐藤知久（芸術資源研究センター教授）
仲村健太郎（デザイナー／Studio Kentaro Nakamura）
西尾咲子（ギャラリー@KCUA学芸員）
藤田瑞穂（ギャラリー@KCUAチーフキュレーター／プログラムディレクター）
松本久木（デザイナー／有限会社松本工房）
森野彰人（美術学部陶磁器専攻教授）
関連イベント出演者：
尾中俊介（詩人・デザイナー／カラマリ・インク）
映像出品作家：
田村友一郎、西尾美也、久門剛史

2019年9月28日（土）–11月3日（日・祝）
京都市立芸術大学芸術資料館収蔵品活用展
still moving library

展示室：@KCUA 1, @KCUA 2
開催日数：31日間
入場者数：1,599人
企画：京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA
主催：京都市立芸術大学

関連イベント
・10月5日（土）19:00–21:00
「ビブリオ・デザインとその熱情」
こだわりが随所に光る、印象的な書籍の組版・装丁を多く手がけてきた3人のブックデザイナーによるトークバトル
登壇：尾中俊介（カラマリ・インク）、仲村健太郎（Studio Kentaro Nakamura）、松本久木（有限会社松本工房）
・10月27日（日）16:00–18:00
「美術における映像アーカイブ」
美術作品、展覧会、ワークショップの記録と映像をめぐるトークイベント
登壇：田村友一郎（美術家）、西尾美也（美術家）、久門剛史（美術家）
・11月3日（日祝）15:00–16:30
「still moving library: これからの図書館」
図書館について、ソフト面・ハード面ともに革新的な取り組みを続けてきた3人のスペシャリストによるトークイベント
登壇：乾 聰一郎（奈良県立図書情報館　図書・公文書課課長）、槻橋 修（建築家／ティーハウス建築設計事務所主宰／神戸大学工学部建築学科准教授）、榊原充大（建築家／リサーチャー）

写真　大島拓也
Photos by Takuya Oshima

Room 1 *Reanimation*

Room 2 *Lines in the Sand*

Room 3 *Organic Honey*

Room 4 *Mooving Off the Land II*

Room 5 Teaching

ジョーン・ジョナスは、その長きにわたるアーティスト活動を通じて、パフォーマンス、映像、インスタレーションなど、複数のメディアを融合させた表現を追求してきた。テーマを世界の情勢によって少しずつ変化させながら、重層的かつ詩的な構造を持つ作品を、83歳となった現在もなお精力的に発表し続けている。大学で彫刻と美術史を学んだのち、パフォーマンス作品を手がけるようになったジョーン・ジョナスは、1970年に日本を訪れて能や歌舞伎を鑑賞し、その完成度の極めて高い視覚言語に感銘を受ける。この経験と、同じく日本滞在時に購入したソニーのポータパックというビデオカメラの二つは、ジョナスのその後の作品を大きく変えることとなった。ニューヨークに帰国してすぐ、ジョナスは購入したてのカメラを繋いだモニターを鏡に見立て、その前で即興パフォーマンスを行う自身の姿を録画する。この最初のビデオテープが、ジョナスの動作を、ライブ、モニター、プロジェクションで同時に鑑賞するという画期的な形式のパフォーマンス「Organic Honey's Visual Telepathy（1972）」に発展していった。

写真　来田猛
Photos by Takeru Koroda

本展では、この1972年から今日に至るまでのジョナスの業績を、今回のために特別に構成された5つの部屋で辿る。《Reanimation》（2019年12月12日にロームシアター京都にてパフォーマンス版を上演）、《Lines in the Sand》といった2000年代以降の代表的なインスタレーション作品、作家活動初期のビデオ作品、最新作の《Moving Off the Land II》に加えて、会場となる@KCUAが大学の機関であることから教育者としてのジョナスの一面にも焦点を当て、貴重な教育資料など（一部世界初公開）も紹介した。

2019年12月14日（土）–2020年2月2日（日）
ジョーン・ジョナス京都賞受賞記念展覧会
「Five Rooms For Kyoto: 1972–2019」

展示室：@KCUA 1, @KCUA 2, Gallery A, B, C
開催日数：39日間
入場者数：3,920人
企画・制作：京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA
主催：公益財団法人 稲盛財団、京都市立芸術大学
企画協力：ロームシアター京都

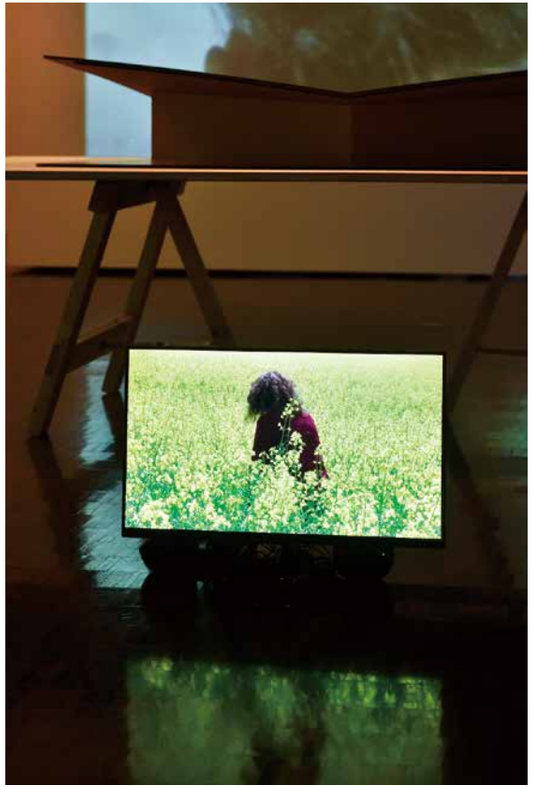
関連イベント（連携企画）
ジョーン・ジョナス京都賞受賞記念パフォーマンス
「Reanimation」
2019年12月12日（木）19:00開演
会場：ロームシアター京都 サウスホール
主催：公益財団法人 稲盛財団
共催：ロームシアター京都（公益財団法人 京都市音楽芸術文化振興財団）
企画・制作：ロームシアター京都
企画協力：京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA

KCUA OPEN CALL EXHIBITIONS

申請展

「申請展」とは、京都市立芸術大学の修了生・卒業生・教職員・在学生を対象とした企画公募により、@KCUA運営委員会による審査を経て選出された展覧会です。大学の附属施設である@KCUAでこそ実施可能な実験精神に溢れた企画や、若手作家による意欲的な企画などが優先して採択されています。

（前年度9月に公募を実施）



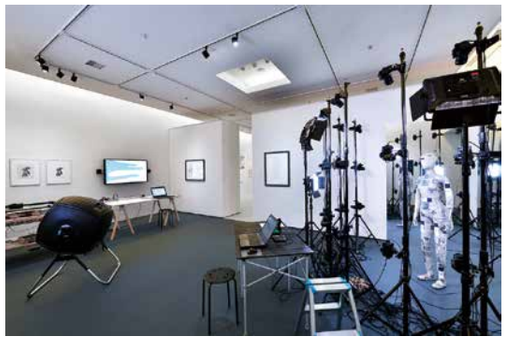
現在シカゴを拠点とするサンドラ・ビニオンは、1970年代半ばよりパフォーマンスの制作を始め、90年代後半より視覚イメージ、音、言葉、音楽といった様々な要素の組み合わせからなる「室内的」映像作品を中心に制作している。2014年から続くプロジェクトである《蒸化（ディスティレ）》は、彼女が13歳の時に出会って以降何度も読み返しているというギュスターヴ・フロベールの『ボヴァリー夫人』から着想されたものであり、小説のイメージとアイデアを「蒸留」し、作品の本質を抽出することで、音、映像、オブジェ、香りといった状況の組み合わせから小説の雰囲気を繊細に立ち上げることを試みたものである。

2019年7月27日（土）–8月18日（日）
サンドラ・ビニオン「蒸化（ディスティレ）」

展示室：@KCUA 1, @KCUA 2
開催日数：20日間
入場者数：752人
主催：京都市立芸術大学

関連イベント
・7月27日（土）17:00
　オープニングレセプション
・8月18日（日）18:00
　クロージングイベント｜ルー・マラッズィ（Lou Mallozzi）
　によるパフォーマンス

写真 大島拓也
Photos by Takuya Oshima



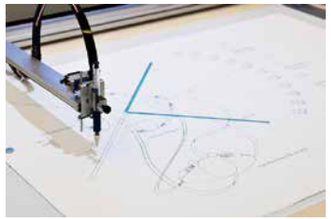


写真 大島拓也
Photos by Takuya Oshima

フォトグラメトリー技術を使用して得られるイメージを基にした版画作品を手がける吉岡俊直（本学准教授）による作品展。フォトグラメトリーとは、被写体をさまざまな方向から撮影したデジタル写真を解析・統合して立体的な3Dモデルを作成する方法で、吉岡は、この手法を使って得られる対象の表面の形だけが抜き出された奇妙なイメージから、日頃見ている世界の認識を逆照射することを試みている。会場内には版画専攻の卒業生・在学生らの版画作品とともに、作品の制作プロセスを開示するメタ的な構造が並置され、版画作品の構造を観客が理解し逆算することで、新たな作品理解へと繋げることが企図された。

2019年8月31日（土）–9月16日（月・祝）
吉岡俊直「複眼と対称のノード」

展示室：@KCUA 1
開催日数：15日間
入場者数：1,126人
主催：京都市立芸術大学

関連イベント
・8月31日（土）17:00
吉岡俊直「複眼と対称のノード」、ぼくらとみんなは生きている5 ～持続可能な愛のステージ～合同オープニングレセプション
・9月8日（日）13:00–17:00
ワークショップ「フォトグラメトリーって何？」

大川原暢人、川又健士、迫 竜樹、鷲尾 怜

Nobuto Okawahara, Takeshi Kawamata, Tatsuki Sako, and Ray Washio

ぼくらとみんなは生きている5

～持続可能な愛のステージ～

Bokura to minna wa ikite iru 5:

Jizoku kanō na ai no stage

2019.8.31 Sat.–9.16 Mon.

初心

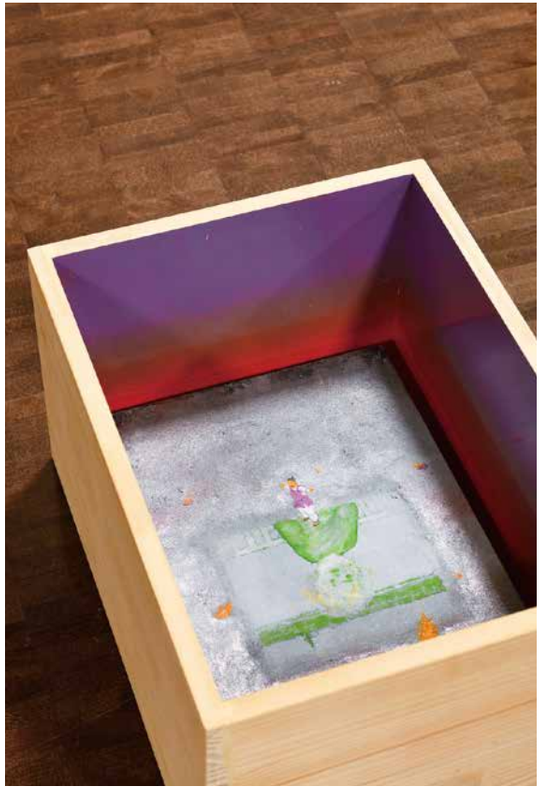
写真 大島拓也
Photos by Takuya Oshima

京都を拠点とする大川原暢人、鷲尾 怜と、東京を拠点とする川又健士、迫 竜樹の大学院生４名からなる「ぼくら」は、離れた場所でお互いの絆を確かめ合うため、指示書と荷物を送り合う。本展では@KCUAの展示室内でそれらを開封、制作、設置した記録と、「ぼくら」のこれまでの活動のアーカイブが展示された。

2019年8月31日（土）–9月16日（月・祝）
ぼくらとみんなは生きている5
〜持続可能な愛のステージ〜

展示室：@KCUA 2
開催日数：15日間
入場者数：1,003人
主催：京都市立芸術大学

関連イベント
・8月31日（土）17:00
吉岡俊直「複眼と対称のノード」、ぼくらとみんなは生きている5 〜持続可能な愛のステージ〜合同オープニングレセプション



本学大学院美術研究科日本画専攻に在籍する岡本秀による、日本絵画の技材をもちいた絵画作品の展示。本展では、おもに画中画や額縁といった、異なる次元を行き来するモチーフを扱うことにより、再現と模倣と表現のあいだで、これから目指すことのできる新しい視覚表現の方向性が検討された。

2019年11月9日（土）–11月24日（日）
岡本秀「次元のえんそく（メタ－ピクニック）」

展示室：@KCUA 2
開催日数：14日間
入場者数：943人
主催：京都市立芸術大学

写真 大島拓也
Photos by Takuya Oshima

山西杏奈 Anna Yamanishi

森山佐紀 Saki Moriyama

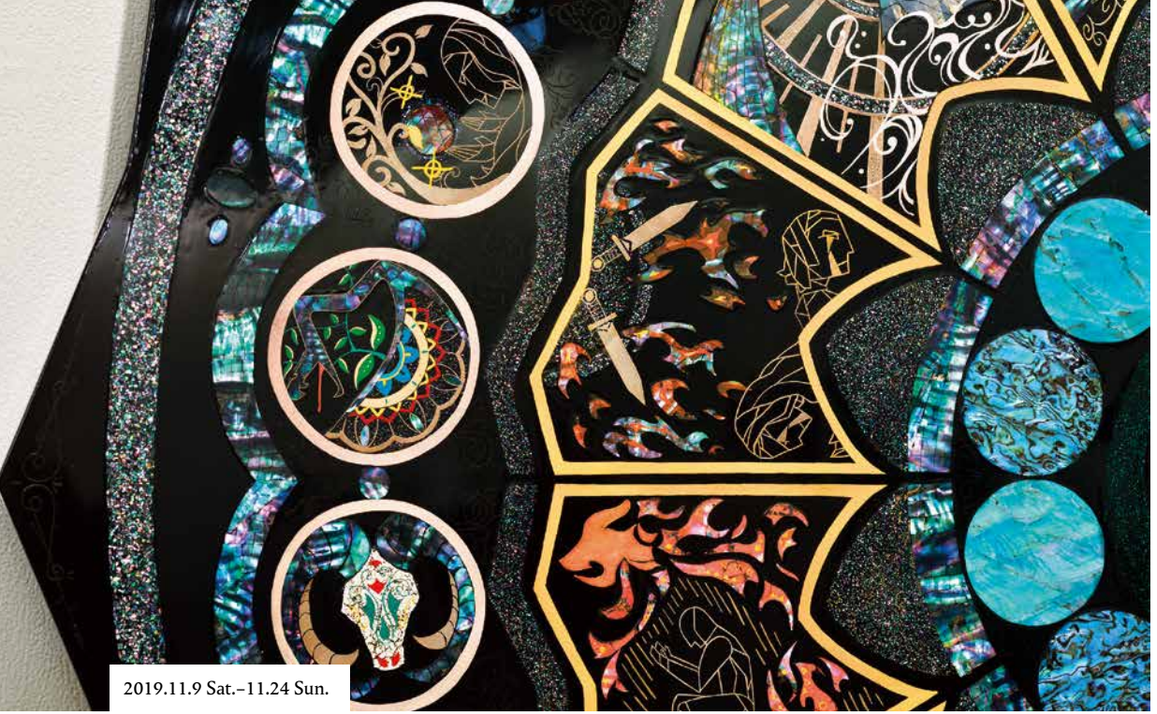
本学大学院工芸専攻（漆工）修了者の森山佐紀と山西杏奈による二人展。森山が漆の伝統的な加飾技法により主に平面作品を制作するのに対し、山西は木工技術をベースとして立体作品を手掛けている。本展では、二人の作品を本学大学院工芸専攻（染織）修了者の天牛美矢子の詩と構成により並べることで現れる「森」の景色の展示を試みた。

2020年2月15日（土）–3月1日（日）
森山佐紀・山西杏奈「朝と夜、森にて」

展示室：@KCUA 2
開催日数：14日間
入場者数：1,036人
詩と構成：天牛美矢子
主催：京都市立芸術大学
助成：アーツサポート関西

写真　松尾宇人
Photos by Ujin Matsuo

KCUA EXHIBITIONS



2019.11.9 Sat.–11.24 Sun.

2019年度 京都市立芸術大学美術学部同窓会展

漆工（塗装）専攻の今熊野時代・沓掛時代を振り返る

KCUA Alumni Association Exhibition 2019

崇仁地域への大学移転を控えて、今熊野学舎・沓掛学舎時代の漆工（塗装）専攻の教育やその成果を漆工（塗装）卒業生・修了生から応募のあった当時の作品と本学芸術資料館収蔵作品を中心に検証した。

出展作家

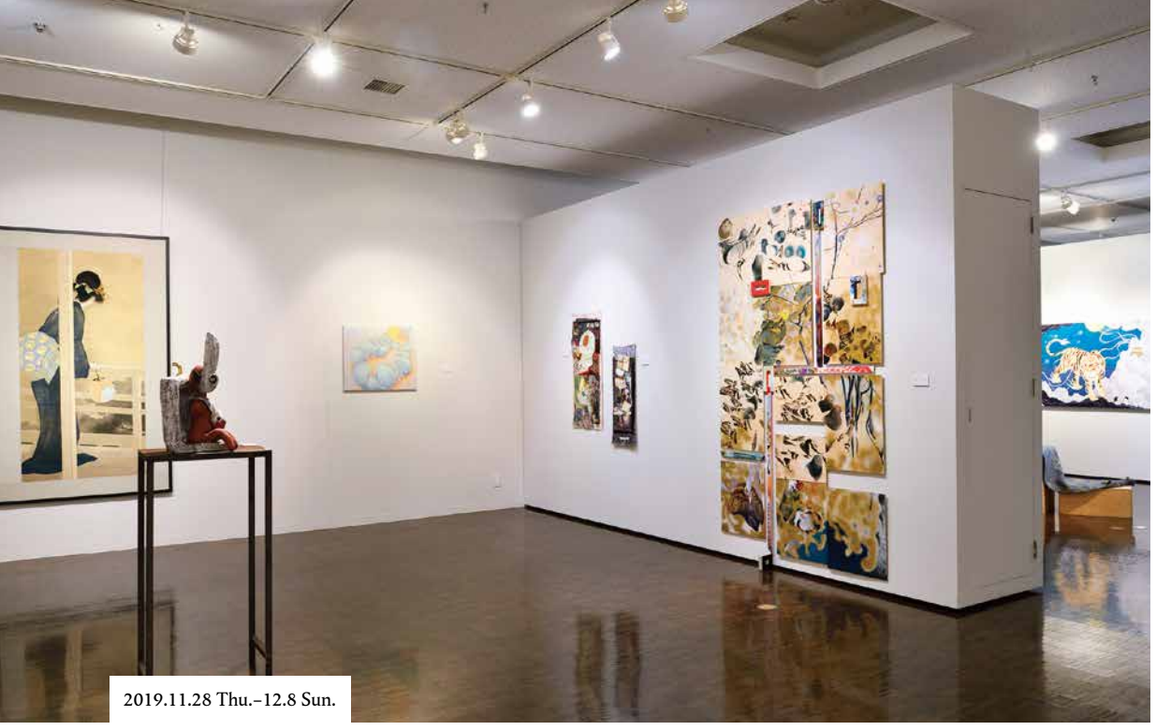
山口秀明、井上隆雄、西村千鶴、望月玉船、
大野 護、金子賢司、田村博文、岡崎秀樹、山中晴夫、
片山晴比古、阿佐見徹、後藤健吉、林 久美、
栗本夏樹、安井友幸、北原美保、村上尚美、
三木啓樂、川端圭介、宇野文夫、三木表悦、
笹井史恵、金潤姫、都呂須早苗、沈明姫、大矢一成、
中村聡美、下條華子、岸野有紀子、宮木 康、
染谷 聡、鶴岡 舞、入澤あづさ、谷川美音、
山西杏奈、熊田悠夢、内海紗英子、福場友美子、
平舘嘉邦、冬木偉沙夫、藤崎 誠、内藤拓男、
宇野文夫、新海玉豊、鄭炳蜜、李東郁

2019年11月9日（土）–11月24日（日）
2019年度 京都市立芸術大学美術学部同窓会展
漆工（塗装）専攻の今熊野時代・沓掛時代を振り返る

展示室：@KCUA 1
開催日数：14日間
入場者数：999人
主催：京都市立芸術大学、京都市立芸術大学美術学部同窓会象の会
企画協力：京都市立芸術大学漆工研究室（京都市立芸術大学美術学部工芸科漆工専攻、京都市立芸術大学大学院美術研究科工芸専攻漆工）

関連イベント
・11月23日（土）13:00–15:00
　出品作家によるトーク

写真　大島拓也
Photos by Takuya Oshima



2019.11.28 Thu.–12.8 Sun.

京都市立芸術大学 | 第30回留学生展

Kyoto City University of Arts | 30th International Student Exhibition

京都市立芸術大学に在学する留学生と市民との交流機会として、毎年冬に開催される本展では、修士課程の本科留学生、研究留学生、交換留学生による作品が展示された。

（本年度出品学生：中国、台湾、韓国、ポーランド、フランス、イギリス、フィンランド、キプロスから32名）

出展作家

大学院修士2年
金 旼秀 | Kim Min Soo、林 婷 | Lin Ting

大学院修士1年
沈 楠 | Shen Nan、劉 信 | Liu Xin、張 嫣慧 | Zhang Xiao Hui、
李 嬌 | Li Jiao、肖 力三 | Xiao Li San、封 懿航 | Feng Yi Hang、
柳 潤閔 | Ryu Je Yoon、周 逸喬 | Zhou Yi Qiao、
呉 聆雪 | Go Ryosetsu

研究留学生
蔡 煜桐 | Cai Yutong、熊 骁 | Xiong Xiao、刘 倩 | Liu Qian、
朱 艺然 | Zhu Yi Ran、徐 逸文 | Xu Yiwen、
張 仲妹 | Zhang Zhong Mei、賀 蘭 | He Lan、易 以柔 | Yih Yi Roh、
關 正玟 | Kuan Cheng Wen、冯 相涵 | Feng Xiang Han

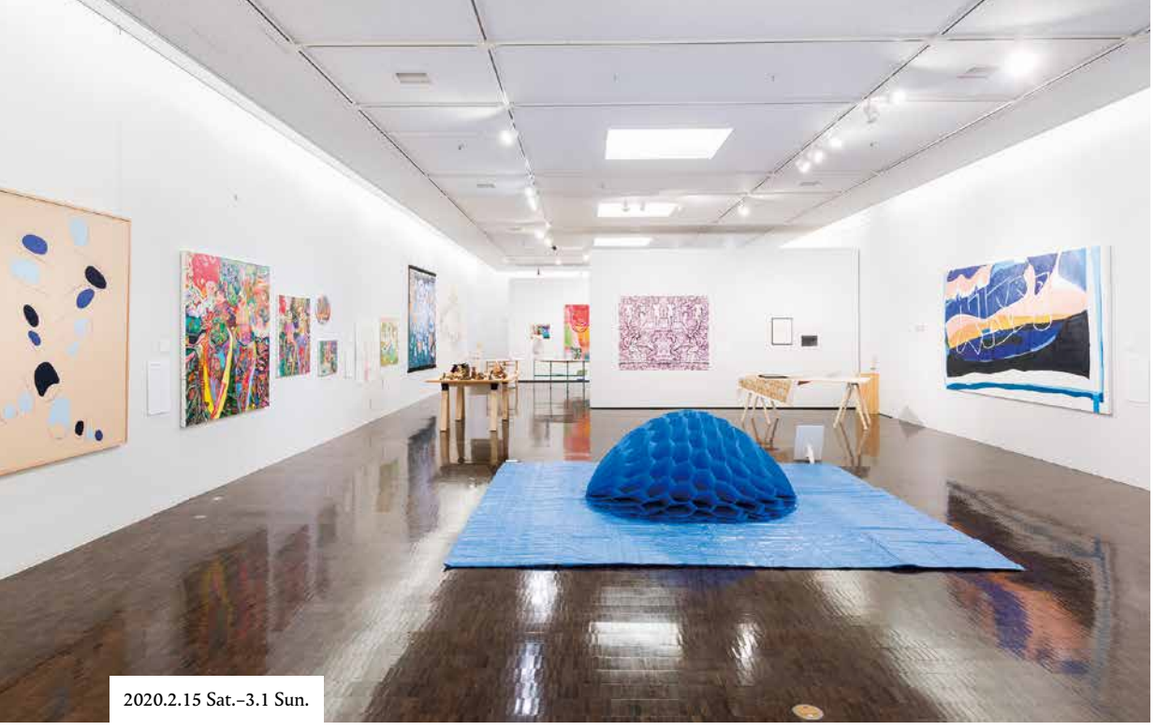
交換留学生
ナタリア・ブジェジンスカ | Natalia Brzezińska、解 放 | Xie Fang、
曺 多惠 | Cho Dahye、ガエタン・バ | Gaëtan Bas、
ジョーダン・エッジ | Jordan Edge、カミーユ・ボワイエ | Camille Boyer、
ズザンナ・カミンスカ | Zuzanna Kamińska、イナリ・シロラ | Inari Sirola、
サヴァス・セオファヌス | Savvas Theofanous、
クララ・ションソール | Clara Champsaur、馬 寧 | Ma Ning

2019年11月28日（木）–12月8日（日）
京都市立芸術大学 | 第30回留学生展

展示室：@KCUA 1
開催日数：10日間
入場者数：521人
主催：京都市立芸術大学

関連イベント
・11月28日（木）17:00
　ギャラリートーク

写真　大島拓也
Photos by Takuya Oshima



2020.2.15 Sat.–3.1 Sun.

横田学 京都市立芸術大学退任記念展　つなぐ・つながる

Kyoto City University of Arts Retirement Exhibition｜Manabu Yokota: *Tsunagu, Tsunagaru*

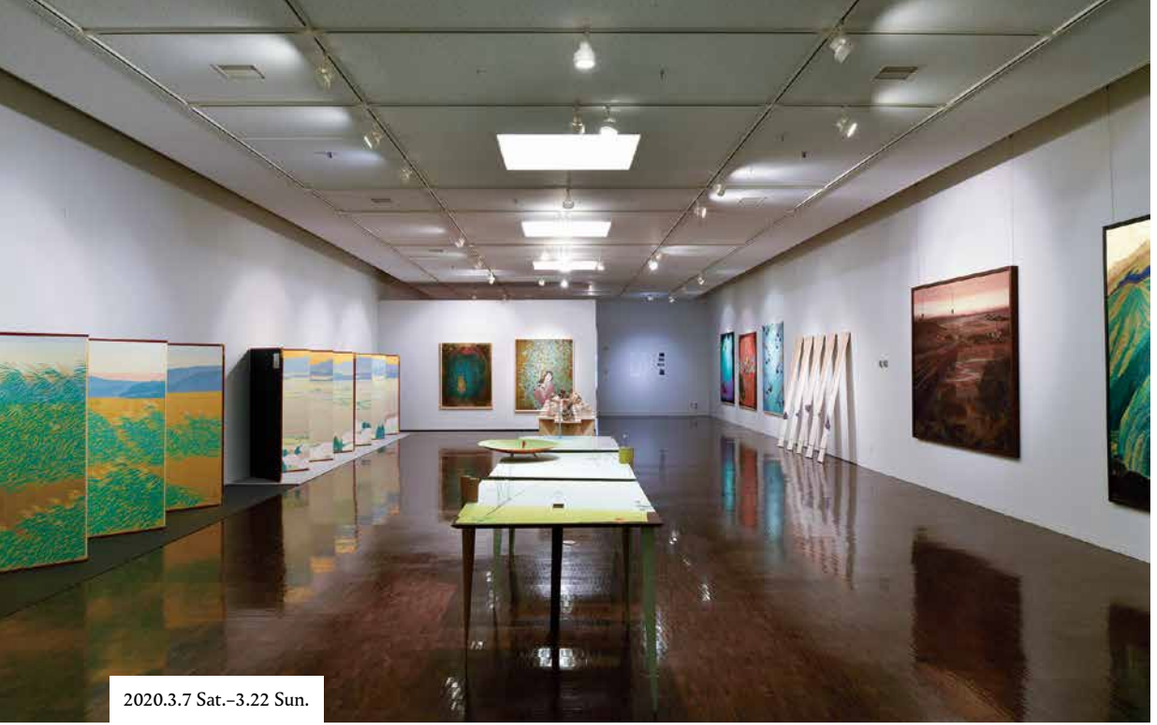
写真　夏池風冴
Photos by Kazayu Natsuike

横田学（本学美術学部教授／美術教育学・教育方法学）の退任記念展として、小・中学校との連携研究の実践記録「つなぐ」と、京都市立境谷小学校「境谷小レジデンス」や京都市立下京渉成小学校「渉成レジデンス」に参加した本学出身の若手作家の作品などの展示「つながる」の2部構成で展示を行った。

2020年2月15日（土）–3月1日（日）
横田学 京都市立芸術大学退任記念展
つなぐ・つながる

展示室：@KCUA 1
開催日数：14日間
入場者数：1,630人
主催：京都市立芸術大学
協力：京都芸術教育コンソーシアム Art-e Kyoto

出品協力者：江川 恵、川田知志、黒宮菜菜、阪中真弥、杉本昌之、髙木智子、中村 潤、西山裕希子、原口みなみ、東 明、東根美沙紀、町田藻映子、松本和子、水田 寛、山田千尋、山本佳奈、吉岡千尋



2020.3.7 Sat.–3.22 Sun.

京都市立芸術大学退任記念 | 京都芸大と私たち

Kyoto City University of Arts Retirement Exhibition | *KCUA and US*

@KCUA 1

三橋 遵 Jun Mitsuhashi

浅野 均 Hitoshi Asano

大野俊明 Toshiaki Ono

中ハシ克シゲ Katsushige Nakahashi

出展作家

浅野 均、大野俊明、中ハシ克シゲ、三橋 遵
Hitoshi Asano, Toshiaki Ono,
Katsushige Nakahashi, and Jun Mitsuhashi

2020年3月7日（土）–3月22日（日）
京都市立芸術大学退任記念
京都芸大と私たち

展示室：@KCUA 1, @KCUA 2, Gallery A, B, C
開催日数：14日間
入場者数：1,471人
主催：京都市立芸術大学
後援：京都市立芸術大学美術学部同窓会象の会

本学美術学部教授の浅野均（日本画）、大野俊明（日本画）、中ハシ克シゲ（彫刻）、三橋遵（染織）の退任記念展。@KCUA 1では「大学と私」というテーマに沿って同4人によるグループ展形式で、@KCUA 2および堀川御池ギャラリーの展示室A, B, Cの4室ではそれぞれ個展形式での展示が行われた。

写真　大島拓也
Photos by Takuya Oshima

特別展｜Special Exhibitions

1 京芸 transmit program 2019
デザイン：仲村健太郎｜Designed by Kentaro Nakamura

2 ジェン・ボー「Dao is in Weeds」
道在稊稗／道（タオ）は雑草に在り
デザイン：松本久木｜Designed by Hisaki Matsumoto

3 京芸 transmit program 2019:
ART OSAKA version
デザイン：仲村健太郎｜Designed by Kentaro Nakamura

4 京都市立芸術大学芸術資料館収蔵品活用展
still moving library
デザイン：仲村健太郎｜Designed by Kentaro Nakamura

5 ジョーン・ジョナス京都賞受賞記念展覧会
Five Rooms For Kyoto: 1972–2019
デザイン：尾中俊介（カラマリ・インク）
Designed by Shunsuke Onaka (Calamari Inc.)

1 A4版フライヤー

2 A4版フライヤー

3 A5仕上がり両観音折りリーフレット

4 B6版フライヤー

5 A4版フライヤー

申請展
KCUA Open Call Exhibitions

6 サンドラ・ビニオン「蒸化（ディスティレ）」
デザイン：サム・シルヴィオ｜Designed by Sam Silvio

7 吉岡俊直「複眼と対称のノード」
デザイン：則武輝彦｜Designed by Teruhiko Noritake

8 ぼくらとみんなは生きている５
～持続可能な愛のステージ～
デザイン：大伴維則｜Designed by Inori Otomo

9 岡本秀「次元のえんそく（メタ－ピクニック）」
デザイン：岡本 秀｜Designed by Shu Okamoto

10 森山佐紀・山西杏奈「朝と夜、森にて」
デザイン：仲村健太郎｜Designed by Kentaro Nakamura

6 A4版フライヤー

7 A4仕上がり二つ折りフライヤー

8 A4版フライヤー

10 B5（変形）観音折りフライヤー

9 A4三つ折りフライヤー

大学事業｜KCUA Exhibitions

11 2019年度 京都市立芸術大学美術学部同窓会展
漆工（塗装）専攻の今熊野時代・沓掛時代を振り返る
デザイン：柞磨祥子｜Designed by Shoko Taruma

12 京都市立芸術大学｜第30回 留学生展
デザイン：張 仲妹｜Designed by Zhang Zhongmei

13 横田学 京都市立芸術大学退任記念展
「つなぐ・つながる」
デザイン：舟越一郎｜Designed by Ichiro Funakoshi

14 京都市立芸術大学退任記念
京都芸大と私たち
デザイン：柳澤裕樹｜Designed by Yuki Yanagisawa

11　ポストカード

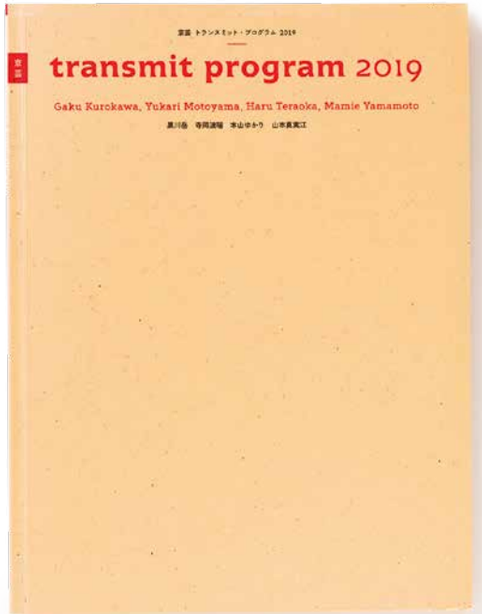
13　A4版フライヤー

12　A4版フライヤー

14　A4版フライヤー

書籍｜Books

京芸 transmit program 2019



判型：B5変形
寸法：26 × 19.8 × 0.7 cm
カラー：フルカラー
ページ数：64 pp.

編集：藤田瑞穂
写真：来田 猛、大島拓也、井上嘉和
装丁・組版：仲村健太郎
印刷：株式会社ライブアートブックス（大伸社）
発行者：京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA
発行日：2019年7月5日

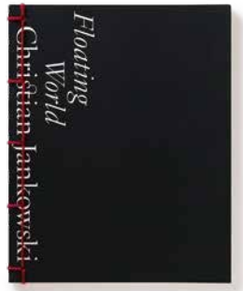
収録内容：藤田瑞穂「『最後の実験場』と『お立ち台』」、展示風景写真、作品図版、アーティストステートメント、参考図版、作家略歴、会場マップ、松岡 剛「作用/反応の場としての作品と展覧会と」
言語：日本語、一部英語

im/pulse

判型：新書判
寸法：17.3 × 10.6 × 2.8 cm
カラー：モノクロ（一部特色）
ページ数：320 pp.

編集：藤田瑞穂、矢野原佑史
編集補助：武本彩子、西尾咲子
装丁・組版：松本久木
印刷・製本：株式会社サンエムカラー
発行者：京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA
発行日：2020年3月31日

収録内容：藤田瑞穂「im/pulse: 脈動する映像」、ヴィンセント・ムーン×contact Gonzo×川瀬慈トークセッション、村津蘭×ふくだべろ×矢野原佑史「参与型展示《モノ／ヒト／物神》に関する省察」、佐藤知久「ヴィンセント・ムーン―映像の参与観察」、contact Gonzo「Physicatopia」、村津 蘭「死者と生者の交感 ベナンの仮面結社とジェラーの死」、神野知恵「韓国芸能と食文化の深い関係」、ふくだべろ「異なる時間的存在についてのカメラによる分節化」、矢野原佑史「グルーヴする『世界』の研究への試論 カメルーン東南部熱帯林地域に暮らすバカの語りの考察から」、川瀬 慈「ドンチョ靴磨きの少年とベル」、執筆者略歴
言語：日本語



クリスチャン・ヤンコフスキー「Floating World」Christian Jankowski: Floating World

判型：A4判変形和綴緊縛仕上げ
寸法：280 × 224 × 5 cm
カラー：フルカラー
ページ数：64 pp.

編集：藤田瑞穂
アートディレクション：松見拓也
デザイン：仲村健太郎
翻訳：板井由紀、京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA
撮影：来田 猛（展示風景）
編集補助：岸本光大、武本彩子、西尾咲子
印刷：株式会社ライブアートブックス（表紙）、株式会社グラフィック
発行者：京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA
発行日：2020年3月31日

収録内容：藤田瑞穂「浮遊から始まる物語」、展示風景写真、作品図版、アーティストステートメント、参考図版、作家略歴
言語：日本語、英語

広報誌｜Zine

たねまきアクア07

判型：B6
寸法：12.3 × 18.2 × 0.2 cm
カラー：フルカラー
ページ数：36 pp.

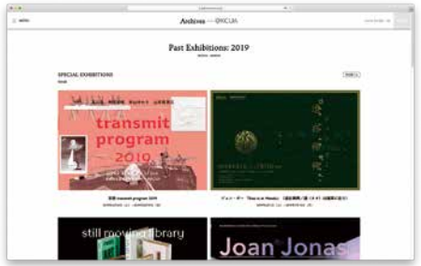
編集：藤田瑞穂、西尾咲子
編集補助：岸本光大
デザイン：仲村健太郎
発行者：京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA
発行日：2020年3月31日

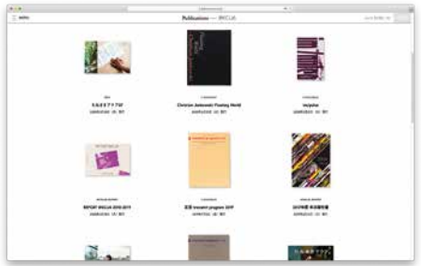
収録内容：たねまきアクアは、@KCUA（アクア）とその周辺に広がる創造活動の現在形、クリエーションが立ち上がろうとしているシーンを紹介していく広報誌です（不定期発行、無料）。
- STUDIO VISIT @KCUA：長坂有希「起点としてのニュータウン」
- REPORT @KCUA：「still moving library」
- PREVIEW @KCUA：「京芸 transmit program 2020」
- SCHEDULE @KCUA：2020.4–2021.3
- VOICE @KCUA：松本久木「ソウテイ」
- WORKSHOP @KCUA：ジェン・ポー「EcoFuturesSuujin」

言語：日本語

図書館は情報を「再編集」する場であるとして、それをどのように活用できるかを考えるためのプロジェクト「still moving library」（pp. 43–50参照）では、展示空間の一角には@KCUAのアーカイブの「再編集」をテーマに「ギャラリーのアーカイブで遊ぶ」というスペースを設けました。会期中に毎週1回、プロジェクトメンバーの一員であるStudio Kentaro Nakamuraの仲村健太郎さん、小林加代子さんとこの空間の中でミーティングを開き、@KCUAに期待される役割とは何か、@KCUAのプログラムに継続的に関心を持ってもらうには何が必要か、などさまざまなトピックについて議論しました。2018年度年次報告書「REPORT @KCUA」および本書は、ここで徹底的に話し合った内容が反映されたものとなっています。

また、これらのディスカッションがきっかけとなり、@KCUAのウェブサイトをリニューアルすることになりました。開催中の展覧会などの情報を探しに訪れた人へのわかりやすさを重視し、同時に、アーカイブなど他のコンテンツにも興味を持ってもらえるように、レイアウトや見せ方などを工夫しています。なかでもユニークなのは、「おかわりアクア」のコーナーです。これは、過去の企画といま行っている企画のつながりなど、新たな切り口でアーカイブを捉え、活用する機能です。これで、@KCUAのこれまでの活動や文脈について、初めて訪れた人にもコンパクトに伝えることが可能になるのでは、と考えています。





ウェブサイトのフォーマットは完成しましたが、活用方法はまだ手探りの状態です。さらに、新型コロナウイルスの感染拡大以降、さまざまな物事がオンライン化されていくなかで、ウェブサイトにどのような機能を持たせていくのか、何を発信するのかということがより重要な課題となってきました。展覧会の会場に訪れたくてもそれが叶わない、といった状況もしばらく続くことが予想されます。いまの状況で自分たちにできるのは、とにかくアーティストとともに活動した記録を可能な限り生きた状態で残せるようにすることです。そしてそれは後々、きっと大きな意味を持ってくると信じて、作業を進めています。

京都市立芸術大学ギャラリー@KCUAについて

京都市立芸術大学では、京都市西京区の学内施設として1991年より芸術資料館を開館し、陳列室で所蔵品の展示を行うほか、大小二つの学内ギャラリー、大学会館など展示に使用できるスペースを持ち、また時にアトリエ棟や新研究等なども活用しながら展示活動を継続しています。これらは作品鑑賞の機会を提供し、また学生たちの日頃の活動成果を公開する実験的発表の場としても機能しています。2010年春、京都堀川音楽高等学校の新築移転に伴って、その敷地内南側にギャラリー棟（堀川御池ギャラリー）ができ、そこに京都市立銅駝美術工芸高等学校と共に、京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA（アクア）が2010年4月2日からオープンしました。

「@KCUA」は大学の英語表記「Kyoto City University of Arts」の頭文字に場所を示す「@」を加えたもので、音読みするとラテン語の「アクア＝水」となります。生命を養う水のように、芸術が人々の暮らしに浸透し、創造力豊かな社会に貢献するという本学の理想を表現しています。アクア・プロジェクトとは「京都市立芸術大学の三つの機関、美術学部・音楽学部・日本伝統音楽研究センターが連携して、ユニークな芸術研究・教育の一端を地域社会に開いていく試み」として開始されたもので、当ギャラリーにも同様の意図が込められています。@KCUAに期待される役割には、以下の三つがあります。

1　教育・研究成果を広く市民へ公開すること

創立以来140年にわたって本学では、様々な成果を生み蓄積し、大学の内外で公表しています。京都市の中心部に発表の場ができたことによって、より身近な場で市民に公開できる機会が得られることになりました。ここでは在校生、教員および卒業生の研究成果に基づく展覧会、ワークショップ、講演・講座等を市民向けに開催すると共に、京都を中心とする産業界や教育機関、研究機関との連携プロジェクトの成果を発表することが期待されます。

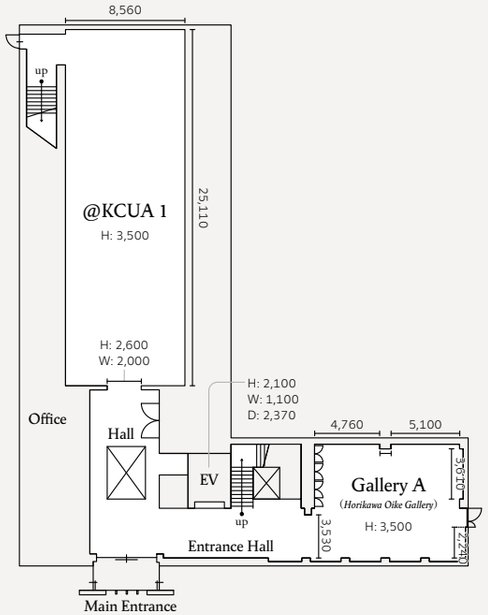
2　芸術文化創出の人材交流の場とすること

ギャラリーにおける展覧会、ワークショップ、講座等の企画に際し、成果の公表そのものを目的とするだけではなく、学内、同窓会、市民、産業界、教育関係諸機関、研究所などとの連携プロジェクトを通じて、広く人々が交流できる場を形成します。

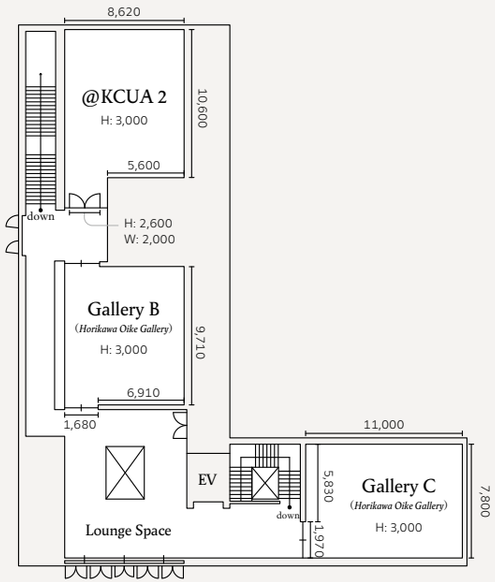
3　芸術資源の連携活用のサテライト機能を果たすこと

本学と市民、京都市、産業界、他の諸機関が連携するにしても、基盤となるのは、情報の収集と交換です。京都が有する芸術資源としての人、物、場所、風景や景観、技術、材料、暮しの知恵に関わる情報を収集し、蓄積し、交流させる機関が必要となります。本ギャラリーは、衛星的な位置を利して、情報の収集、蓄積、交換（発信と受信）の一翼を担います。

1/500
単位｜Scale: mm



1F



2F

2019年度 京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA｜運営委員会組織

委員長

鶴田憲次　@KCUA長／堀川御池ギャラリー館長

委員

森野彰人　@KCUA担当理事
中原浩大　美術学部長
栗本夏樹　美術研究科長
礪波恵昭　芸術資料館長
長谷川直人　美術学部広報委員会委員長
中井 悠　音楽学部教員
奥村美佳　美術学部教員（副委員長）
舟越一郎　美術学部教員
齋藤 桂　日本伝統音楽研究センター教員
佐藤知久　芸術資源研究センター専任研究員
藤田瑞穂　@KCUAチーフキュレーター／プログラムディレクター
岸本光大　@KCUA学芸員（2019年10月–）
西尾咲子　@KCUA学芸員
藤本信和　事務局長
淵田聡子　総務広報課長
天沼 憲　連携推進課長（事務局次長事務取扱）
松井菜摘　附属図書館・芸術資料館学芸員

※肩書については2019年度当時のものを記載

2019年

5月16日（木）　運営委員会
7月1日（月）　運営委員会
10月21日（月）企画・申請展部会、運営委員会

2020年

1月23日（木）　運営委員会
3月6日（金）　運営委員会

2019年度 京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA｜運営体制

@KCUA長
鶴田憲次（堀川御池ギャラリー館長 兼任）

@KCUA担当理事
森野彰人（京都市立芸術大学美術学部陶磁器専攻教授）

チーフキュレーター／プログラムディレクター
藤田瑞穂

学芸員
岸本光大（2019年10月–）、西尾咲子

スタッフ
伊藤学美、清田泰寛

京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA
2019年度（平成31年度）年次報告書

発行日：2021年3月31日

編集・発行：京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA
Edited and published by Kyoto City University of Arts Art Gallery @KCUA
〒604-0052 京都市中京区押油小路町238-1
238-1 Oshiaburanokoji-cho, Nakagyo-ku, Kyoto 604-0052 JAPAN
PHONE: 075 253 1509
FAX: 075 253 1510
URL: http://gallery.kcua.ac.jp

ブックデザイン｜Book design
Studio Kentaro Nakamura

印刷｜Print
株式会社ライブアートブックス
LIVE Art Books Inc.

ISSN 2435-6018
©2020 京都市立芸術大学 Kyoto City University of Arts

http://gallery.kcua.ac.jp

京都市立芸術大学
Kyoto City University of Arts
@KCUA